

B

B-9 内側型側頭葉てんかん手術摘出標本における¹²⁵I-iomazenil autoradiogram所見とWechsler知能検査(WAIS-R)の比較検討

国立療養所静岡東病院(てんかんセンター)¹⁾,
山梨医科大学小児科²⁾

○佐田佳美¹⁾²⁾, 井上有史¹⁾, 松田一己¹⁾, 西村成子¹⁾,
久保田裕子¹⁾, 大坪俊昭¹⁾, 鳥取孝安¹⁾, 三原忠紘¹⁾,
八木和一¹⁾

【目的】側頭葉てんかん(TLE)症例においてしばしば認知や記憶の障害を伴うことが知られている。内側型TLE症例の術前WAIS-Rと手術摘出標本の海馬各部位の中樞性ベンゾジアゼピン受容体(BZR)濃度を比較検討した。

【対象と方法】対象は、内側型TLE手術例36例(発症年齢:8.1歳、手術時年齢:25.0歳、罹病期間:16.9年)。全例右利きで、月1回以上の複雑部分発作を有する薬剤抵抗性難治症例であった。側方性は左焦点19例、右17例で、手術は27例に前側頭葉切除術、9例に選択的扁桃核海馬切除術を施行した。摘出標本の冷凍切片から¹²⁵I-iomazenil autoradiography法を用いてBZR定量を行い、海馬各部位及び外側皮質のBZR濃度を計測した。また、術前6か月以内に施行したWAIS-Rの言語性IQ(VIQ)と動作性IQ(PIQ)を優位半球である左側頭葉切除例(LTLE)と右切除例(RTLE)に分け、各部位のBZR濃度とその相関を調べた。

【結果】(1)全IQの平均はLTLE:77.3±14.9とRTLE:76.9±19.1で有意差はなかった。(2)平均VIQはLTLE:76.4±14.7、RTLE:79.9±15.8とLTLEで低く、平均PIQはLTLE:85.8±16.5、RTLE:80.6±21.7とRTLEで低い傾向を認めた。(3)CA1のBZRとLTLEのVIQは正の相関(n=17, r=0.51, P<0.05)を認めたが、PIQは一定の傾向を認めなかった。一方、RTLEではPIQでCA1のBZR濃度の低下と共に低下する傾向が見られたが、VIQでは一定の傾向を認めなかった。(4)その他の海馬領域、外側皮質のBZRとIQには一定の傾向が見られなかった。

【結論】内側型TLEの言語性認知障害には優位半球CA1のBZR濃度低下をきたす病態が関与している可能性が示唆される。

B-10 精神病症状を示したてんかん患者におけるてんかんと精神病の遺伝負因

国立療養所多磨全生園¹⁾, 日本大学医学部精神神経科²⁾,
東京医科大学精神科³⁾, 東京医科歯科大学医学部神経精神科⁴⁾,
浜松医科大学精神科⁵⁾, 駒木野病院⁶⁾,
国立療養所厚瀉病院⁷⁾

○足立直人¹⁾, 松浦雅人²⁾, 小穴康功³⁾, 大久保善朗⁴⁾,
武井教使⁵⁾, 原 常勝⁶⁾, 大沼悌一⁷⁾

【目的】幻覚妄想などの精神病症状をもつてんかん患者(てんかん精神病)について、多くの発現機序が示唆されており、精神病の遺伝負因についても言及されている。しかしSlaterら(1963)は精神病の遺伝負因について、一般人口における出現期待値と同等であるとした。その後、Flor-Henry(1969), Perezら(1985)も否定的な結果を示した。これまでわずかにJensenら(1979)が濃厚な精神病遺伝負因を報告しているにすぎない。しかしいずれの報告でも、てんかん精神病群は十分な症例数ではなく、また対照群の設定がないなど、方法論的な問題が多い。本研究では多数のてんかん精神病症例に加え、精神病症状をもたないてんかん患者や精神分裂病患者の対照群として、第一度近親における精神分裂病の遺伝負因について検討を加える。

【対象および方法】東京都内で成人てんかん外来および精神科外来をもつ5施設において調査を実施した。てんかん発症後に幻覚妄想を主とした分裂病様の精神病症状を呈した272例(てんかん精神病群);男性145例,女性127例,平均年齢40.7歳において、第一度近親におけるてんかん患者および精神分裂病患者を調査した。さらに1996年11月中に上記施設を受診した精神病状態の既往のないてんかん患者659例(一般てんかん群);男性350例,女性309例,平均年齢36.0歳、ICD-10精神分裂病患者612例(分裂病群);男性310例,女性302例,平均年齢41.2歳を対照群とした。なおいずれの群においても、アルコール薬物嗜癖例、老年期痴呆例を除外した。

【結果】てんかん精神病群において、第一度近親にてんかん患者がいるものは18例(6.6%)、精神分裂病患者がいるものは15例(5.5%)であった。いっぽう一般てんかん群では、てんかん55例(8.4%)、精神分裂病2例(0.3%)であった。また精神分裂病群では、てんかん8例(1.3%)、精神分裂病68例(11.1%)であった。てんかん群ではてんかんの遺伝負因が、精神分裂病群では分裂病の遺伝負因が高率に見られ、てんかん精神病群ではてんかんと分裂病の負因がほぼ同等に認められた。